

# 3・11 後を生きる

## 性が 性と理性

根津光代

一ミリメートルも違わず

コゴミやタラの芽は成長し

春は宝の山

一ミリグラムも違わずキノコは生え

櫛の木はドンケリを落とす

実りの秋

誰一人去年のものと区別できない

誰一人その変化に気づけない

それは故意に投下されたものと違い

「すぐに」ではなく

十年、二十年のスパンで

気づかされるものだから

何も変わらず花は咲き

小川に小魚が泳ぐ

蝶が楽しげに飛ぶ

トンボもセミも何も気づかない

彼らの一生は短い

その一生に事は起らず

いつもの様に世代を繋ぐ

何もかも元どおりなのに

決してそうではない恐ろしさ

線量計だけがそれを教える

盲人の白杖の様な線量計

それだけが唯一抛り所

人間にそれは察知できない

人間にそれは制御できない

人間がそれを持つべきではなかった

人間は地球を作れなかったが

地球を破壊するものを作った

人間は作ったものを使ったがる

それは人間の性かもしれないが

かろうじて

人間は理性を持っている

その理性に私たちは全てを

懸ける。

(「脱原発・自然エネルギー」218人詩

集」より)

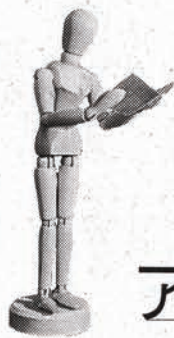
ねづ みつよ  
1959年、神奈川県生まれ。「北の詩人会議」など所属。東日本大震災で被災し、宮城県・山元町の仮設住宅で暮らす。



誰よりも敏感に繊細に知っていたのは、人ではなく、生き物やそれを育む、大地や空。環境であった。

それでも世代を繋いでゆく彼ら、それでも決して世代を絶やそうとはしない彼ら、私たち人間は何よりも彼らに謝罪しなくてはならない。人間の責任の全てを担った一人として、彼らに謝罪しなければいけない。正しかったのは、あなたたちだったと。

何十億年も繰り返して来たあなたたちの生命を奪ったのは私たち人間だったのだと。



アシタノコトバ

